

若山牧水全隹

六卷

若山牧水全集

第六卷

雄鷄社刊

若山牧水全集 第六卷

昭和三十三年六月三十日發行

著者若山牧水發行者武内俊三印刷
者草刈親雄印刷製本所東京都新宿
區市ヶ谷臺町一番地中央製本印刷
株式會社發行所東京都中央區日本
橋江戸橋一丁目七番地株式會社雄
鶏社電話千代田(27)二七九一〜二番
振替東京二六二五五番

定價六〇〇圓

編集・校訂

若山喜志子
大悟法利雄

落丁、亂丁の際は
お取換えいせします。

目次

静かなる旅をゆきつつ

上編

富士裾野の三日……………	九
溪より溪へ……………	一六
落葉松林の中の湯……………	二五
信濃の晩秋……………	三二
二晩泊り……………	三八
水郷めぐり……………	六八
湯ヶ島より……………	七三

箱根と富士	101
-------	-----

中編

溪ばたの温泉	111
上州草津	113
草津より澁へ	115
山腹の友が家	118
木曾路	119
利根の奥へ	121
みなかみへ	127
利根より吾妻へ	128
吾妻川	128

吾妻の溪より六里が原へ……………三七

下 編

子供の入學……………三九

香 貫 山……………四四

發動機船の音……………五二

村住居の秋……………六〇

雪のおもひ出……………六七

櫻咲くころ……………七四

溪のながれ木……………八〇

溪をおもふ……………八四

土を愛する村……………九二

入江の奥……………三六

みなかみ紀行

みなかみ紀行……………三八

大野原の夏草……………四〇一

追憶と眼前の風景……………四一〇

杜鵑を聴きに……………四三四

白骨温泉……………四四三

通蔓草の實……………四四九

山路……………四五八

或る旅と繪葉書……………四七〇

野なかの瀧……………四八三

或る島の半日……………四九六

伊豆紀行……………五〇三

雪の天城越……………五二九

解説……………大悟法利雄……………五三五

第六卷

紀行・隨筆二

静かなる旅をゆきつつ

序に代へて

とにかくに自分はいま旅に出てゐる。

何處へでもいい、とにかくに行け。

眼を開くな、眼を瞑ぢよ。

さうして、

思ふ存分、

靜かに靜かにその心を遊ばせよ。

斯う思ひつづけてゐると、

汽車は誠に心地よくわが身體を揺つて、

眠れ、眠れ、といふがごとく、

靜かに靜かに走つてゆく

例言

私は旅を好む。旅に出てをる間に、僅かに解放せられた眞實の自分に歸つてゐるのだと思ふ様な場合が甚だ多い。

この『靜かなる旅をゆきつつ』はそれらの旅から歸つて、或はその旅さきで、書いた紀行文を主として輯め、それに机の側に籠りながら折々書いてゐた小品文を加へて一冊としたものである。これらは會て各種の雜誌新聞に出したものだが、すべて行數や時間の制限のあるなかに書いたゝめに、それゝ文章の長短筆致に一致を缺き、且つ諸所重複した所などのあるのを憾みとする。ことに一つの連續した旅、たとへば何日に出て何日に歸つた或る一期間の紀行が數篇に分つて書かれ、それらがとりゝに右の事情の下に置かれてあるのなどに對しては一層この感が深い。

『利根の奥へ』『みなかみへ』『利根より吾妻へ』『吾妻川』『吾妻の溪より六里ヶ原へ』等は右の續きものゝ紀行の一つであつた。最後の六里ヶ原からは高山鐵道を想はせらるゝ私設の汽車に乗

つて芒と檜との冬枯れはてた高原を横切り輕井澤に出、それから信越線で戸倉温泉にゆき一泊、翌日松本在の淺間温泉に行き二泊、賑やかな歌會を濟ませて更らに桔梗ヶ原の中にある妻の在所を訪ね、廿六日に東京に歸つたのであつた。大正七年秋のことである。同じく連續したものに『落葉松林の中の湯』『信濃の晩秋』がある。これは大正八年の晩秋で、大町からは其處の友人（これは『山腹の友が家』の中に出て居る友人のことである）が忙しい中を松本在の村井驛まで送つて來、一泊してその翌日東西に別れて私は東京へ歸つた。も一つ長く續いたものに『溪ばたの温泉』から『上州草津』『草津より澁へ』『山腹の友が家』を経て『木曾路』に終つてゐるものがある。これは前に通つた吾妻の溪から草津に曲り、信州へ出たものであつた。木曾からは名古屋に一泊、小さな歌會を開いて歸つて來た。大正九年の初夏であつた。『水郷めぐり』のあとは潮來から下總水海道町に廻つて其處の友人を訪ね、翌日三人して筑波山に登り、山腹の町に一泊して歸つた。これは八年の初夏であつた。それ／＼の旅の終りまで書いておけばよかつたが、残念にもそれをしなかつた。その他『溪をおもふ』『溪のながれ木』は大正八年、『櫻咲くころ』『溪より溪へ』『二晩泊り』等は同九年東京在住時代の執筆で、あとはみな同年夏駿河沼津町在に移り住んでからそのを／＼に書いたものである。永い後の自分の思ひ出のために書き添へておく。

彌次喜多式のも時に悪くないが、ほんたうに静かな旅、心を遊ばせ解き放つ旅、われとわが足音に聴き入る様な旅をするとならば、ひとり旅に限る様である。そして行くさきざきでも人に逢はぬことである。本書を校正しながらいよ／＼この感を強くした。これからの私の旅は多分おほくこの傾向を帯びるであらうと思ふ。

この本の文章はまことに幼く、且つ拙い。獨りで苦笑し赤面し心痛しながら、いま校正刷を見つつある所である。然し、この一冊を編んだことによつてこれからは幾らか自分にもよき文章——といふよりよき旅を、なすことが出来るかも知れぬといふ氣がしてゐる。

大正十年六月廿二日

駿河沼津在楊原村にて

若 山 牧 水

上 編

富士裾野の三日

十月九日午後一時、沼津驛を發した汽車が三島を経て裾野の傾斜を登り始めた頃、私の腰掛け側の窓には柔かな日影が射してゐた。然し空には何處となく雨氣を含んで、汽車の直ぐ横手に聳えてゐる愛鷹山の墨色は眼に見えて深かつた。この山はいつも落ちついた墨色をしてゐる木深い山であるが、けふはとりわけ濕つて見えた。峰から空にかけては乳の様な白雲が渦を卷いて、富士はその奥に隠れて見えなかつた。

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山

眞黒なる愛鷹の山に卷き立てる雨雲の奥に富士は籠りつ

私の掛けてゐる背後の席には大工か指物師と見ゆる二人連が頻りに自分たちの爲事のことを語